「世界の複数性と無垢」2025.1.24　発表者　小泉　徹
課題図書　ウィリアム・サローヤン「僕の名はアラム」柴田 元幸 訳　新潮文庫

主人公アラムが７歳から１７歳になる間に起きた１４の物語からなる短編物語集です。

それぞれの物語の中核には、私たち大人が囚われている論理とか倫理観とか常識などからはかけ離れた「ピュアな精神」があります。そのために「理解しようとして、真面目に真剣に読もうとする」前向きな読者の方々を、けむに巻いてしまったところがあるように思います。

文学作品は、現実とは別の空間を作り出します。小説が言語を用いて作り出されているために、私たちは現実的な感性や知識を使って読むことも出来ますが、文学が文学である理由、言い換えればそれが評論ではなく小説として書かれなければならなかった理由は、確かにあるのだと思います。

「僕の名はアラム」の場合は、「無垢」とか「純粋さ」とでも言うべきものの力を小説化しているところに、その理由があるのだと思いました。

その力は、様々な、本来相容れないような複数の世界の間で、自由自在に動き回り、接着剤のように働いたり、あるいはそっと離れるに任せたりします。

その力は、主に主人公アラムという少年の自由で純粋な心身の働きとして実現されていきます。その過程が、心地よく、微笑ましく、時には希望のようなものさえ感じさせてくれるように思われる作品です。